

---

# 仮面ライダーディケイド×IS（インフィニット・ストラトス）×とある科学

投光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド×インフィニット・ストラトス×I S×とある科学

### 【Nコード】

N5479Z

### 【作者名】

投光

### 【あらすじ】

仮面ライダーと二つの科学が交差する

注) 学園都市はあまり関係がなくなります

駄文ですがよろしく願います

## プロローグ

「会場は、ここだな」

一人の16歳ぐらいの青年が広いホールみたいな会場を見てそうつぶやいた

「任務、スタート開始」

彼の言う任務は、試験会場の護衛であり、試験官み  
たいな役割である

そのため決死って迷子になってはならない

2

「………やば、迷子だ」

前言撤回だ、こいつは迷子ほかだ

「あり〜おかしいな〜後輩を連れてきたのにな〜」

もはや、哀れとかしかいえない状況、しかもどんどん  
奥にはいっていく

「やはり戻ろうか？こうならこの会場」とば  
ん？」

見ると、同じ状況なのか一人の制服を着た生徒が迷っ  
ていた

「あの、試験会場はこっちですかね」  
等々にそんなことを聞かれた

「……い、一応いっておこう、俺は風紀委員だ」  
しかし、彼は風紀委員ではない、その説明はまた次回

だ

「あゝあの学園都市の」

「でも、何ですか？ここ、学園の『外』ですよ？」  
「なんか？とびきり大事なことがあるとかないとかで、  
呼ばれたんだ」

「ふん」

「あ、そうだここにいきたいんですけど？」

「あゝっつう……俺も、迷子なんだわ」

「え〜〜〜!!」

とりあえず、二人で試験会場もとい出口を探している

「あり？そついやあゝまだ名前聞いてなかったな」

「はい、俺、織斑一夏おりむら いすかです」

「おう、俺は、十年士おと じゅうしだ」

「さうてゝ、とりあえず部屋をあたるだけあたろう」

「はい！」

で、いろいろ迷った結果ある部屋について  
あったのは、

「・・・ISだよなあゝあれ」

「たしかに」

IS、この世界では、学園都市の『外』の兵器としては最強を誇る兵器である。はつきいって学園都市とISが戦えば世界がふつゝに壊れるといわれている。なので、学園都市とIS委員会は戦争をしないという名目でこれまでの平和に保たれていた

「…………面白そうだ、触ってみるかあ、織斑」

「えゝ！…………でも、面白そうですね」

その部屋に一つだけ置いていたISに一夏が触った

ピカーーン！ISの起動音が聞こえた

「うわっ！えゝゝ起動したぜえゝい、織斑くんよ

」

「いやいや、おかしいですって、ほら、ISから離すと移動音がなくなりましたよ」

織斑はISから手を離した

「…………じゃあ、見間違いないか俺が試

す

士も触ってみた、すると

ピカーーン！と起動音が聞こえた

その時、ボタン！と閉めたはずのドアが開いた、中に複数の女性がやってきた

「あなたたち何やっているの！」

「防犯カメラで見たけどもう一人いたなんて、おど

ろぎよ！」

女の人全員が携帯をかけている

「やばいことになったね〜織斑くん」

「そうですね」

二人はたちすくしかできなかつた

## EP2 入学（前書き）

オリキャラ紹介

とちねいしかた

十年士

性格：あまり女には興味がなく、基本的にだれでも優しく接するの  
でよく誤解される、だが特定の人間にしか本当のことを話さない  
特徴：どこかで人間を差別しているのか、差別している人間にはフ  
ルネーム、認めた人間は上の名前で呼ぶ、下の名前で呼ばれる人間  
はあまりいない



## EP2 入学

「ああ、学園都市はお前にまかせるよ、 あ？  
・うん、荷物は『外』のホテルに送ってもらった。おう、・・・ま  
あ、こつちのことは心配ないから安心しろ じゃあな」

士は携帯を切った、それと同時に黒いスーツを着た女性が入ってきた

「おい、士、お前誰に電話していた？」

女性は知り合いに話す口調で聞いていた

「いやいや、・・・ただ、しいていうなら不格好な携帯を持ったダチかな・・・」

「そうか」

女性は少し黙った

「そついやあ、あ、学園都市と戦争にならなかったのか？・・・織斑さん？」

「ここでは、織斑先生だ、ばかもの」

「へいへいよ」

ただ、学園都市とここでは『上』と呼ばれるISの組織の上司が一時的な口論となり、戦争の引き金にもなると予想はさ

れた、だがどちらも望むことのない結果だったのでこの組織の勸  
奨を許さないIS学園に入れることでこの問題は解決した、その問  
題があつて彼は、入学式にでれなく、1日遅れで入学するかた  
ちになつた

「……あいかわらず、私は認められてないか  
？」

「いや、織斑さんを認めたら俺が認めた人間が可哀  
そうになるからさ」

士は、それだけ言うと織斑先生と教室に行つた

「お前たち、席に着け、今日は転校生を紹介する」

教室の中から織斑先生の声が聞こえ、スピーカー  
と音が聞こえたが無視をしていた

「はいれ」

士はめんどくさそうな顔をしたがすぐにまじめな顔  
をした

「みなさん、初めまして今日から一緒に勉強する十年士です、よろしく」

ありきたりな挨拶をしたが拍手もなく沈黙が続いた

「（あり、間違えたかな）」

前を見たらほとんどの女子生徒が小刻みに震えていた

「「「お」」」

「お？」

「「「男だあああー！」」」

困った顔をしている  
女子生徒が騒ぐ中、織斑先生と副担らしき女性が

そんな中、

「あれ、土、俺てつきり学園都市に戻るのかと思っ  
ていたぞ」

空気の読めない発言に女子生徒の黄色い歓声が止む

「あれ？十年くんと織斑くん知り合いなのかな？」

「いやいや、どう考えても違っわよ」

「だって学園都市の人ですもの」

さまざまな言葉が飛ぶなか、副担の先生がまとめる

「はいはい、静かにしてください、十年くんの席は  
織斑くんの後ろです」

明らかに順番的に違うのだが、先生たちの配慮だろ

席に着いた土は織斑に質問に答えていた

「なんで入学式にでなかつたんだよ？」

「うん？学園都市の中からでていくための資料製作  
が大変でな〜」

「ふ〜ん、そうなんだ」

「おい、二人とも」

織斑の顔色がどんどん悪くなるゆっくり後ろを向く  
織斑周りも静かになる

「ち、千冬ね「織斑先生だ」 織斑先生なんです

か？」

手には出席簿があり、織斑の頭をたたく、スパーンの音はこれだと思った

「いつて~~~~~！」

織斑が自分の頭を押さえる

「次は、転校そうそう馬鹿をやった十年、お前だ」

出席簿が振り下ろされるが、そのまま空振りに終わ

った

「何？」

土の体がなかったからだ

「やれやれ、だれだ〜こんなところにペンを落とす

たのは？」

机の下から土が出てきた、どうやらまぐれでうまく逃げれたのだろう

本当にまぐれなのだろうか？

「ふっ、まあ今回は見逃してやる、これでHRは終

わる、以上」

二人の先生は教室から姿を消した

「よかったな、士、まぐれでもあれを受けなくて」

「ん？ああ、そうだな」

士は手を興味無さそうにひらひらと振る

「あれ？ 士のやつ、ペンなんて持ってないじゃないか？」

4時間も終わり、さすがに疲れたのか織斑はグダ  
アーと机に倒れていた

「はっはっは、織斑くんも情けないねえ」

「……その言い方、今は突っ込まないでおく」

どうやら、かなりお疲れの様子だった

「……ちょっと、よろしくて？」

不意に後ろから訪ねてきた、士と織斑が振り向くと金髪のお嬢さんらしき人物がいた

士は一瞬顔を嫌にした後、部屋を出て行こうとした

「お、士さんにも、ようがあるのですよ!」

「……………」

「なんですか!そのうわっなんだよ、みたいな顔、いいから戻ってきなさい!」

もうちょっとでどくドアを名残惜しそうに見た後、士は自分の机に戻る

「……………で、用ってなんですか、お嬢さん」

「人を子供扱いしないでくださいな!…んっんまあいいですわ」

「なあ、士……………」

「なんだい?織斑くん」

「この人……………誰?」

「まあ、私を知らない!このセシリア・オルコットを?イギリス代表候補生であり入試首席のこの私を!」

「セシリア・オルコット……………んすう〜う?どうか

っで・・・」

俺が試行錯誤している間に織斑が質問をした

「代表候補生って、なんだ？」

その質問はありか？土以外の教室にいた女子はどうもこけたらしい

「あのな、織斑くん、代表候補生ってのは国家代表  
IS操縦者のその候補生、確か学園都市の中にIS代表候補生とい  
う名目で簡単な検査だけで入れた気がしたなあ？」

「へ、代表候補生ってそんなにすごいのか、てつよ  
くよく考えたら彼女と土って知り合いなのか？」

と何気に感心したり突っ込んだりする織斑だった

「あり？たしかオルコットって・・・」

「あいかわらず、冗談のお得意な方ね？」

「いんや、やっぱり知らないなあ」

パン！と何かをたたく音がした、セシリアが土を平  
手打ちしたのだ

「ひ、ひどいですわ土さん！何も、何も覚えていない  
なんて！」



セシリアはただ教室から出て行った、数人の女子がセシリアを追いかけて出て行った

「……………」

士は何も言わず、真つ赤な頬を手で押さえていた

「おい、冗談はきついで、士」

織斑は、机から立ち上がっていた

「……………彼女のことは覚えているよ、ただ……………」

「え？おい、士！」

士は何も言わず出て行った

「　　おう、俺だ、急にわりな……………セシリア・オルコットという名に覚えはないか？　　そうか、そんな約束を、いや、後遺症じゃないんだ、タダ純粹な物忘れだ、へっ

心配性だな、あ？違う！？・・・まあいい、じゃあなっ」

ここは士が誰もいないと踏んだ外のベンチで携帯をしていた、本来なら生徒は所持を禁止されているが、学園都市とのコンタクトをするため必要だとIS学園も所持を許可してくれたのだ

「・・・やっぱ、俺」

「どンドン、記憶が消えてんのかな？」

士はベンチをおもっいきり叩いた



### EP3 クラス代表？

「今年のクラス代表を決めてもらいたい」

休みの次の時間、織斑先生が授業の前にそんなことを言った

なぜか一人いないクラスのみんなに

「ん？十年はどこ行った、織斑」

「え？土はどこに行ったって・・・」

事情を知っている織斑にとって言うべきか言わざるべきかわからなかった

しかし、

「いんやあゝおかしいねえゝ迷子だわ、ま・い・

い」

ボタンとドアが開いたらそこには土が立っていた

「あ、授業始まっていたか？・・・」

斑先生が止める  
そう言いながらも何気に席に座ろうとする士を織

「貴様・・・私の授業がそんなにつまらないか？」

「・・・そんなつまらないことで休むほど俺は  
バカじゃありませんよ」

士は手で電話の合図を出した

だが、それでも背景に炎が見えてしまう

「言ったはずだ、二度はないと」

今度こそ、出席簿ではなくグーが飛んできた

が、

がすん、と殴った音じゃない音が聞こえた

士が振り下ろされた鉄槌ハンチを手で受け止めていたか

らだ

「・・・俺だって、この鉄槌は死んでも受け

たないんでね」

織斑先生が手を士の手から外した

「・・・だが」

「へ？」

がすん！と織斑先生のもう片方の手から出席簿  
が振り下ろされた

「・・・・・・・・っ~~~~」

あまりの痛みから悲鳴も出ない土

「私のパンチを受けとめるのはたいした腕だが、  
まだまだ甘いぞ十年」

織斑先生は教壇に戻った

「さて、バカが遅れたのでもう一度説明する、こ  
のクラスから今年のクラス代表を決めてもらいたい、自薦他薦は問  
わない、誰かいないか？」

「はい、織斑くんを推薦します」

クラスの女子生徒の一人がほぼ即答の速さで言った

「はい、私も」

「私も」

クラスからつきつぎに手が挙がる

「え？何で？」

「おお、織斑くんがんばれ、がんばれ」

「なに、他人事みたいなこといったるんだよ」

「なにつて、本当に他人事だからだね」

と、男のないげない会話をよそにどんどん話が進ん

でいく

その中に

「はい、私は十年くんを推薦します」

「私も、それがいいと思います」

「いいよね」

「ほら見る、お前も選ばれているじゃないか」

織斑が少しにやけた顔で士のほづを見る

「・・・・・・・・」

「ん？、士？」

疑問に思うのも無理わない、士はふざけて嫌そう

な顔をするのではなく、本当にいやな顔をしていたのだから、違和感があった

「おゝい、士あゝ」

「ん、ああ、何かな、織斑くん？」

何を聞いたらしいのかわからなかった織斑は、少し困ったが話をしだした

「いや、お前もいいかげん、俺のことを一夏って呼べよなあゝって思ってた」

士は鼻で笑った

「・・・いや、俺は織斑くんと呼ばせてほしいな、悪いかい？」

「いやいいんだ、ただ、友達はみんな俺のことを一夏って呼ぶから、つい」

「俺も友達って思っているよゝただねえゝゝ」

「ん？士、どうしたんだ、相談事だった？」

「いんや、いんやなんでもない、それよりも何か決まったらみただいぜ」

士が首で前を見るのサインがあったので織斑は前も見て愕然とした



めるぞ」

「それでは、織斑 一夏、十年 士から代表を決

景を見ていた

織斑は焦っていたが士はただ楽しそうにその光

「待ってくれ、俺は

」

「納得がいきませんわ！」

声が聞こえてきた

一課が否定をした時、後ろから聞いたことのある

「……………セシリア・オルコット」

「そのような選出は認められません！男がクラス  
代表なんて言い恥さらしですわ」

クラスの全員がセシリアを見ている中、士だけが  
前を向いていた

「それに……………」

セシリアは口をかみ、士のほうを見た、士はそれ

を無視するように前を向いていた

「だいたい、文化としても行進的なこの国に住まなければならぬ私の苦勞が」

「セシリア・オルコット!!」

叫んだのは、ずっと前を向いていた土だった

「な、なんですの、今更謝つても遅いんですからね」

その話を無視するように土は机に座って話を勧める

「これは俺の独り言だが、学園都市のダチに代表候補生と言う名目で学園都市に入った人間を調べてもらった、その中に・・・あなたの名前があった」

「じゃあ、思い出してくれ」

「独り言だから答えられないが、学園都市に入つたあなたの案内役をしたのがこの俺だ、そしてこんな約束をしたらしい『いつか・・・あなたの名前を呼べる日が来れば、お前を、本当の意味で・・・愛せる女になるだろう』とふつ、我ながらうまいことを言つたねってね」

その時、クラスの子が

「「「きゃあーーーーー!!」」」

だの、「狙ってたのに〜」

だの、明らかに告白と受け取れる言葉に興奮して  
いた

「だが、俺は覚えていない」

その言葉に、教室が静まり返った

「そう、ですか・・・でも、なぜあの休み時間の

時！私の名前を

「なら、今からおまえと話をしてやる、セシリア・  
オルコット・・・どう考えてもクラス代表は一人だ、だからお前が勝  
つたらお前の質問に全部答える、出来る限りなあ、だが、俺が勝つ  
たら・・・もう、あの時の記憶を思い出させないでくれ・・・どうだ  
？」

セシリアは困惑したが、立ったまま悩んで答えを  
出した

「・・・いいですわ、かならず、かならずあなた  
のことを全部聞きますから！」

セシリアは土に、ビシッと指をさし宣言した

「ふっ、わけないぜえ〜セシリア・オルコット」

「はあくいい感じでしめたいが、オルコット、十年、織斑、クラス代表はもちろんISで決める、試合は次の月曜、第3アリーナで行ういいな」

「ちよつ、ちよつとまってよ、千冬ね」織斑先生だ」  
織斑先生、明らかに俺はのけ物の方がいいんじゃないですか？」

すると土が織斑の肩をたたいた

「どんまい、織斑くん」

簡単に言おう、織斑くんは今のはのけ物であると・・・

・・・

## お詫び

感想の中にこの私、仮面ライダー死鬼が他人の感想から逃げていけると言う感想がありました。

いま思えば私はみなさまからの感想を受け付けられないようにしていました、

自分の未熟さを痛感しました。

今回のこのお詫びで、まだ許せないとお思いになられる人がいるのでしたら、私の二次小説作品はご覧にならなくて結構です。しかし、許すと言ったら変な言い方になります、今までのふざけた私の身勝手なことを許してくれるのでしたら、私はとてもうれしいです。

今までは違い感想を受け付けますので、どうかこの私の今まで身勝手な行動を許してください、お願いします。

EP4 IS ニュイケイド(前書き)

明けましておめでとうございませう  
相変わらずの駄文です

## EP4 IS ニイケイド

「たのむ、士！ISの訓練手伝ってくれ！この通り！」

織斑は士の机り向き手を合わせ士に指導してもらおうと頼んだらしい

「いや、無理だから織斑くん」

「そこをなんとか、頼む」

このくだりが何回続いたことが、もう次の授業まで時間がない

「………ん？」

士は悩んだふりをして目を泳がせていたら窓側の長い黒髪の女の子が見えた

「ふ〜ん……あの子、織斑に？……まさかねえ

「えっ、士？どうしたんだ筈の方を向いて」

どうやら、さっきの士の言葉は聞こえてないらしい、それより

「筭い？お前・・・まさか」

「おう、彼女は篠ノ之しののへ 筭ねて言いって俺達おれたちは幼馴染幼馴染なんだよ」

笑顔で言える織斑くんが怖いと思った士である、そして士が一瞬眉間にしわをよせた

「んじゃ、あの子に教えてもらえよ、織斑くん」

「え？士なんでだよ？」

疑問に思っている織斑に士がやれやれと説明する

「あのなあ、俺とお前は次、戦うことがあるかもしれない、それにも幼馴染さまに教えてもらおう方がいいに決まっているだろうがよ」

「ん〜確かにそうだけど」

「おら、前を見る、次の授業、織斑先生だぞ」

そして、次の授業が始まった



授業が終わり放課後の職員室、織斑はさつき篠ノ之さんにISの訓練をつけてもらいに行っただけらしい

「失礼します、織斑 千冬先生はいますかねえ」山田先生」

「えっそ、そうですね。あ、いましたよ織斑せんせい」

手を振る山田先生を横目で見ながら織斑先生は土の頭上にパンチを落とした

だが、土はそれをよける

一瞬悔しそうな顔をした織斑先生は何もなかったように手を組んだ

「職員室に入る時は、ちゃんと挨拶しろ、バカ者」

「へいへい、んでちょっと話があんだわ、千冬先生」

一瞬驚いた顔をした織斑先生だったが、すぐに顔を戻した

「こつちに来い」

「ほっほっほ」

士が連れてこられたのは職員室の近くの相談室だった

「で、話はなんだ？士？」

入って早々、織斑先生が聞いてきた、

士は適当にあつたイスに座る

「織斑 千冬、お前、俺にわざとこのクラスにしたのか？」

「何のことだ？」

「とぼけるな！篠ノ之 箒、あの女、あいつの妹か？」

「そうだ」

「……………」

真面目な顔になった士は、ただ自分の手を見ていた

「んじゃ、邪魔したな」

出て行こうとした士を織斑先生が止める

「殺すのか？篠ノ之を」

土は鼻で笑った

「まあ、妹だからといって、殺すのは俺の主義じゃねえんだわ」

織斑先生は手をのけ、土を通した

「あと、これは、決まったことで異論は認めんがお前の部屋は私と同じだ」

織斑先生は土に部屋の鍵を渡した

「へっ、寮長室かい」

「文句を言うな、ちなみに私が1年の寮長だ」

「まあ、そうなるわな」

土はその場から一步も動かなかった

「ん、ああそうだ、俺、次の月曜までちよっくら学園都市までかえるわ」

「なぜだ？」

「俺のISを迎えにいかないといけないんでねえ」

「……わかった」

「んま、適当な理由つけといてくれや」

士は歩き出し、IS学園から出て行った

次の月曜日……

「ここは、ISを待機させておく場所だろうか中には、  
織斑、篠ノ之さんがいた

「士の奴、まだ風邪治ってないのですか、織斑先生」

「心配するな、織斑、あいつは来るさ」

「あ、織斑くん君のISが来ましたよ」

その時、

ブーーンと何かのエンジン音が聞こえた

「おい、一夏の音」

「気をつけろ、筭」

「なっ・・・／＼／＼」

面目な顔だ

篠ノ之さんが赤くなっているの知らず、織斑は真

バイク音が近くなる

そして、バイクが見えてきた

ていた

バイクは尋常じゃないスピードで織斑たちに迫っ

だが、バイクは二人にぶつかることなく止まった、  
言い方を変えればバイクが二人の少し前で右にずれそして、壁にぶ  
つかった

「あつて〜な、こつちが事故つたわ〜」

らしい

あまりの大惨事に二人は状況が飲みきれていない

バイクに乗っていた男は二人の目の前まで近づいた

「久しぶりだね〜織斑くん」

「お前、その声、士なのか？」

何も言わずヘルメットを脱いだら案の定、士だった

「あ、んまそうなんだけどよ、背中いつて」

る士

そう言いながらのバイクの方に行きバイクを立て

「てか、いったい何なんだよそれ」

「俺の専用機かね」

士がバイクをぼんぼんたく

バイクはあれだけの事故なのに傷一つなかった、  
むしろ壁の方がかなりひどいことになっている

「おい、士、てめゝなに、かっこつけて事故つて  
んだ、情けない」

今度は奥から士や衣織斑と同じぐらいの男性の声  
が聞こえてきた

「おいおい、こっちはけが人だぞ、巧たくみ」

「とって、怪我なんかしてないだろうが」

「まあ、たしかに」

出てきた男は灰色の肩までの髪があり、目は黒い、  
士と同じぐらいの背がある

「士、この人は誰だ？」

を無視する

「でていけ、ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ」

篠ノ之さんが敵意をむき出しにするが、巧はそれ

『久しぶりだな、赤光せっこう 巧たくみ』

スピーカーから織斑先生の声が聞こえた

「おう、じゃあ今からそっちに行くからな」

巧は再び奥に消えていった

『最初は、土お前が行け』

「え〜俺が〜」

『壁代を弁償させるぞ』

「はいはい」

しぶしぶ、土はジャケットを脱ぎバイクにまたが

った

「着てたんだな、ISスーツ」

「おう、これで外にいたら寒くてねえ〜」

土は、グリップを握るとエンジンがかかった

「こい、ディケイド」

そして、土の乗っていたバイクが消えISが現れた

色はマゼンタ、姿は仮面ライダーディケイドには似つかない形だった、ただディケイドらしさと言えば胸の部分に黒と白の右に寄っている十字のマークだけだ

「んじゃ、行ってくるわ」

「おい、土、気をつけるよ」

その言葉の後、土は何も言わずに出て行った



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5479z/>

---

仮面ライダーディケイド×IS（インフィニット・ストラトス）×とある科学

2012年1月4日10時49分発行